幼児の教育　第101巻　第8号　平成14年8月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

# 幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2002年8月号

第101巻　第8号　日本幼稚園協会

# 21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与えるシリーズ！

編集委員　森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（東京家政大学教授）
柏女霊峰（淑徳大学教授）

好評発売中

判型　B6判　各176～208頁
定価：本体各1,200円+税

既刊本

| | |
|---|---|
| ①新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗　著 |
| ②新時代の保育サービス | 柏女霊峰・山本真実　共著 |
| ③カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美　共著 |
| ④子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一　著 |
| ⑤知的好奇心を育てる保育 | 無藤　隆　著 |
| ⑥保育者の「出番」を考える | 吉村真理子　著 |
| ⑦地方自治体の保育への取り組み | 山本真実・尾木まり　共著 |
| ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える | 阿部和子　著 |
| ⑨自由保育とは何か | 立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子　共著 |
| ⑩保育者が出会う発達問題 | 大場幸夫・前原　寛　共著 |

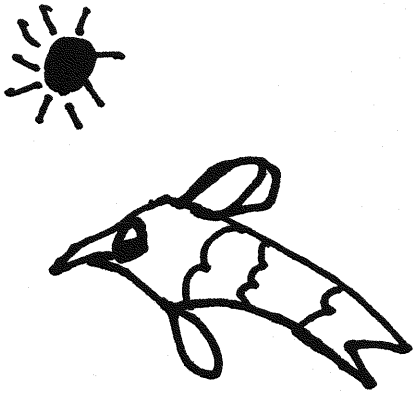
＜以下続刊＞

キンダーブックの フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第101巻　第8号



# 幼児の教育　目次

――第一〇一巻　第八号――


ある日……（4）

巻頭言　私の誤認……千羽喜代子…（6）

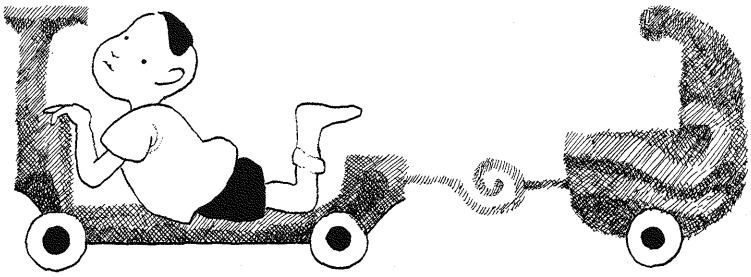
三木成夫といのちの世界
(二)すがたかたちの解剖学　(2)原形とメタモルフォーゼ……吉増　克實…（10）

モンテッソーリ教育思想の誕生(6)
活動主義による批判と知的教育……早田由美子…（20）

TO・NI・KARAひろば　その三……嶺村　法子…（28）

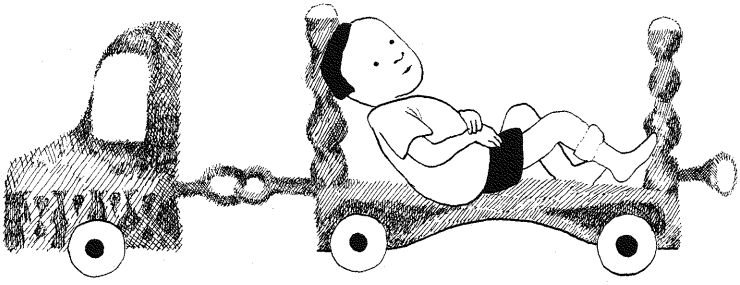


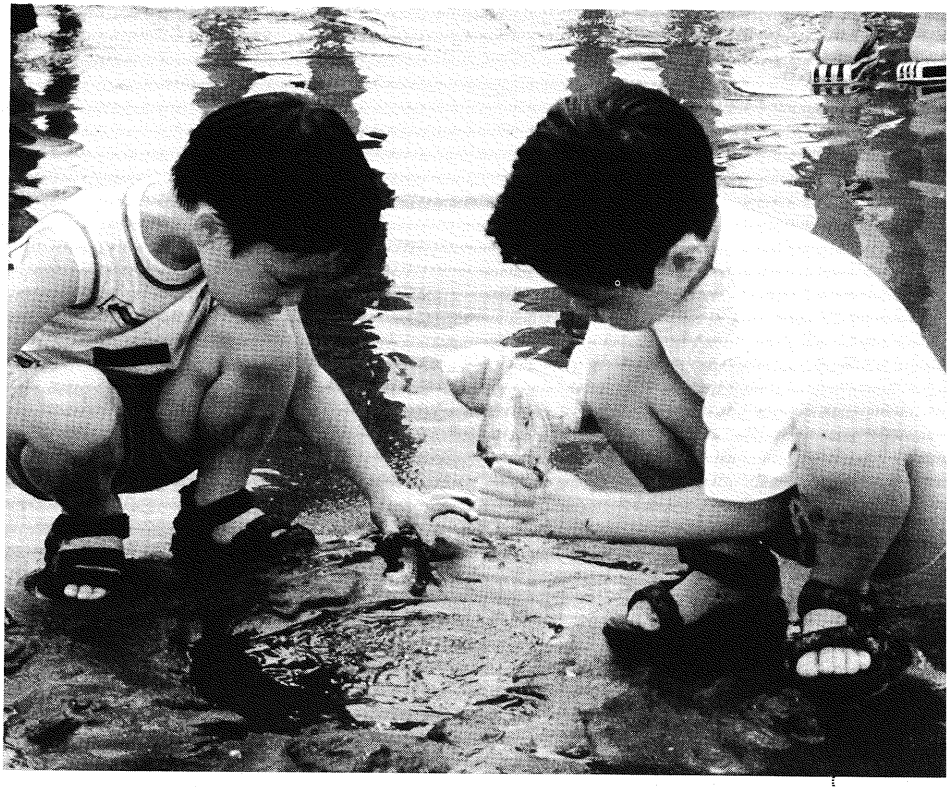
© 2002
日本幼稚園協会

障碍をもつ幼児の保育(1)―この子と出会ったとき― …津守　真・津守　房江…（30）
生きもの共存の畝間から(4)　溢れる天敵に守られて ……徳野　雅仁…（36）
特集〈緑蔭図書紹介〉
探検家シャクルトン―現代の求めるリーダー像― ……藤田　宗和…（38）
『らいおんみどり』にかくされた「さすがのおねえさん」……田澤　薫…（43）
同級生の小説 ……山本　政人…（48）
介護の本質を考える ……小林　瑠以…（52）
生活発表会をめぐって―保育の見直し一年目― ……入江　礼子…（56）

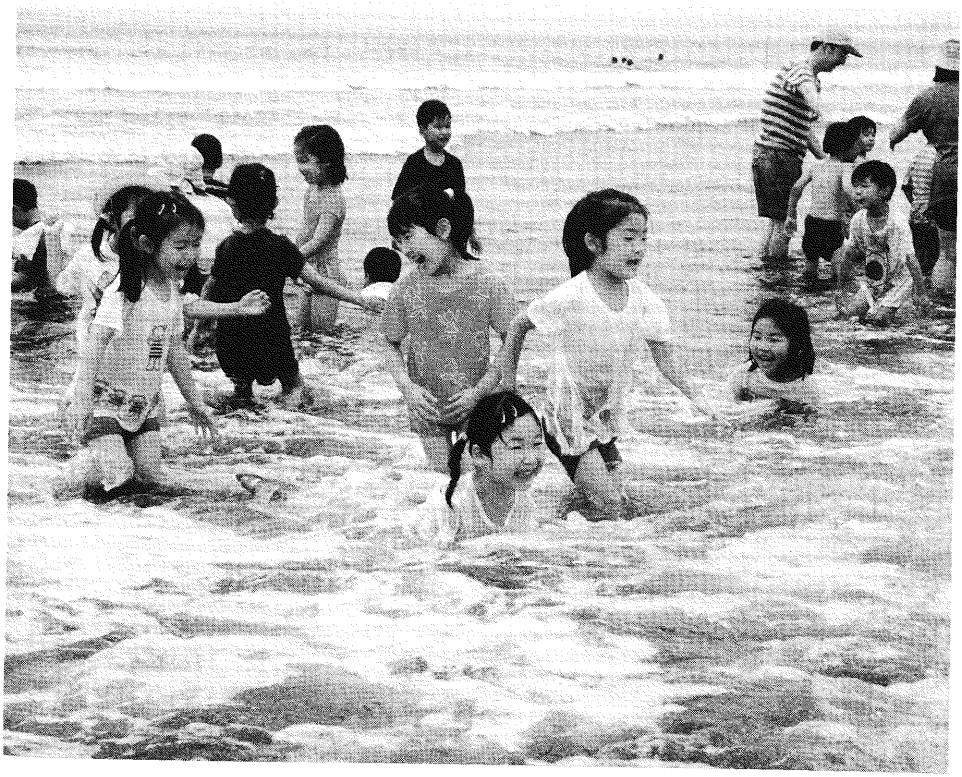
表紙絵／佐々木麻こ
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「ひとっとび」
編集委員／田代　和美・桝田　正子・高橋　陽子
編集部／仲　明子





# ある日

撮影・平野　清



巻頭言

# 私の誤認

千羽　喜代子

二〇〇〇（平成十二）年に、「幼稚園教諭養成のための参考資料としての調査」を、筆者の所属している学科で行った。その目的は、①子どもの出生数の減少による乳幼児の保育・教育施設の定員割れから生起するところの問題、②就労する母親の増加による保育需要の量的増加と多様化がもたらす問題などの社会的要因による乳幼児教育機関の現状の変化から、幼稚園教諭養成の方針及び内容を検討する必要性があるのではないかと考えたからである。

その調査の結果から幾つかの問題点が明らかになったのであるが、その一つに、園規模に関する事柄が挙げられる。すなわち、最近の傾向として私立幼稚園からの求人募集の中に大規模幼稚園がみられるようになったことから、東京都の私立幼稚園の園規模の現状がどのようになっているかを知ることによって、実習園の園規模の状況を判断する手がかりが得られるのではないかと考えたからである。

表1・表2は、東京都私立幼稚園に限ったものであ

るが、二〇〇一年と二〇〇二年の『全国学校総覧私立篇』を資料とした。各園の内情を調べていないので、表示された数の上での読み取りであることをお許しいただきたい。

表1は、東京都私立幼稚園の開園の状況である。二〇〇一年から二〇〇二年の一年の間に一・二五%の園が減少しており、それは、十六区内、都下三市に及んでいる。在園児二十人以下となると余儀なく閉園せざるを得ない園が多いが、それでも存続させている園もある。大部分の園は現状を維持するのに精一杯の努力を払っていることを知る。

次いで表2は園規模を二十三区と都下二十八市別に表示したものである。園規模は園児数五〇人区分とした。最小二人から最大六三八人である。

これをさらに園児数三〇〇人未満の区（市）とそれ以上の園児数の在園している区（市）別にした。筆者の常識では、幼稚園の定員あるいは全園児数は、多くても二〇〇人未満ではないかと考えていたが、多少譲歩して三〇〇人未満とした。

一つの園を運営していくとき、園長は子どもの掌握とその保護者の掌握の両方ができる範囲で園規模を考

表1　東京都私立幼稚園の開園状況

| 園数＼年次 | | 2001年 | 2002年 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| 東京都23区 | 休　園※ | 28 | 27 | 7園(1.2%)減 |
| | 開　園 | 575 | 569 | |
| | 小　計 | 603 | 596 | |
| 東京都28市 | 休　園※※ | 5 | 5 | 4園(1.3%)減 |
| | 開　園 | 305 | 301 | |
| | 小　計 | 310 | 306 | |
| 計 | | 913園 | 902園 | |

資料は『全国学校総覧　私立篇』（原書房）による
※　港区、文京区、台東区、渋谷区、足立区、江戸川区、墨田区、江東区、品川区、目黒区、大田区、世田谷区、中野区、豊島区、北区、葛飾区
※※　八王子市、立川市、町田市

えると、せいぜい二〇〇人程度ではないかという声を耳にしていた。歴史的にみると、幼稚園保育及設備規定（明治三十二年、一八九九年）では、その根拠は定かでないが、「幼稚園の幼児数は百人以内とす、特別の事情あるときは百五十人まで増加することを得」とあり、幼稚園令（大正十五年、一九二六年）では、「幼稚園の幼児数は百二十人以下とす、但し特別の事情あるときは約二百人までに増すことを得」とある。

なお、先に、「その根拠は定かでないが」と記したが、国吉栄氏は、関信三が『幼稚園記』に幼稚園の規模にふれていることを指摘している。すなわち、「五十乃至百員ノ幼稚ヲ一園中に集容スヘキコトヲ陳説セリ（後略）」と（『幼児の教育』一〇〇巻六号　二四頁）。

戦後の幼稚園設置基準においては園規模は示されていない。イギリスのインファント・スクールでも、その規模は一五〇人程度であると書物で読んだことを記憶している。

ところが筆者の常識は全く打ち砕かれてしまった。表2から理解できるように、東京都八八〇開園私立幼稚園の一一二園（一二・七％）が三〇〇人以上の園児数をもった大規模園で、その内訳は二十三区では十二

| 450～ | 500～ | 550～ | 600～638人 | 計 | 内訳 300人以上 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 2 | 1 | 1 | 476園 | 69園(14.5%) |
| | | | | 99園 | 0園 |
| 4 | 2 | 1 | 1 | 575園 | 69園(12.0%) |
| 1 | 1 | | | 272園 | 43園(15.8%) |
| | | | | 33園 | 0園 |
| 1 | 1 | | | 305園 | 43園(14.1%) |
| 5 | 3 | 1 | 1 | 880園 | 112園(12.7%) |

%、都下（市）では十四％である。

なお、園児数二五〇人以上の場合は、十七％、二九％となり、都下（市）の方が大規模園が多い。

因みに園児数五〇人以上二五〇人未満の園は、二十三区では七六％、都下二十八市では六七％である。

また、五〇人未満の園は区内七％、都下（市）では四％と、区内の比率が都下（市）のそれに比べると高い。

幼稚園の大規模化は通園バスの使用によると考えられる。そこでの保育に一人一人の活動が大切にされる生活の保障は難しく、そのことは幼稚園の学校化につながる。

そもそも幼児にとって幼稚園とはいかなるところであるか、を再考すると共に、バスを使用する設置者のみならず保護者の側にも、便利さによって幼児の生活の本質を見失うことのないよう願うものである。

（大妻女子大学）

表2　東京都私立幼稚園の園規模（2001年）

| 地区別園数＼園児数 | | 2～49 | 50～ | 100～ | 150～ | 200～ | 250～ | 300～ | 350～ | 400～ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東京都23区 | 14区 | 24 | 119 | 103 | 68 | 65 | 28 | 33 | 15 | 13 |
| | 9区※ | 17 | 35 | 27 | 9 | 9 | 2 | | | |
| | 小計 | 41 | 154 | 130 | 77 | 74 | 30 | 33 | 15 | 13 |
| 都下28市 | 23市 | 11 | 32 | 52 | 47 | 48 | 39 | 26 | 9 | 6 |
| | 5市※※ | 1 | 5 | 7 | 9 | 4 | 7 | | | |
| | 小計 | 12 | 37 | 59 | 56 | 52 | 46 | 26 | 9 | 6 |
| 計 | | 53 | 191 | 189 | 133 | 126 | 76 | 59 | 24 | 19 |

資料は『全国学校総覧　私立篇』（原書房）による
※　千代田区、中央区、港区、新宿区、文京区、渋谷区、荒川区、墨田区、豊島区、
※※　昭島市、小金井市、田無市、福生市、あきる野市

# 三木成夫といのちの世界

吉増　克實

## (二)すがたかたちの解剖学

## (2)原形とメタモルフォーゼ

### 変化するかたち

いのちのかたちは、絶え間なく変わり続けるかたちです。そして変わり続けるいのちのかたちの変化のしかたを研究するのがすがたかたちの解剖学の仕事です。しかし実は変化の研究には難しい問題が潜んでいるのです。それはふつう科学の研究は変化しないものを見つけようとするものだからです。つまり移り変わる現象のおおもとに何か変わらないものがあると考え、それを真理として取り出すことを目指しているのです。そこでは変わらないものに価値があるとされ変わるものには価値がおかれません。でも、すがたかたちの解剖学が知りたいのは

まさにこの変わるもののすがたなのです。

研究も人間の広い意味の心のはたらきの現われなのですが、心のはたらきには「あたま」のはたらきと「こころ」のはたらきとが区別されます。変わらないものを見いだそうとするのは「あたま」です。それに対して変化を見いだすのは「こころ」なのです。しかけしくみの解剖学ではあたまが主役になるのに対して、すがたかたちの解剖学ではこころが主役になります。こころが主役となる思考を指示的思考と言い、指示的思考による学問を現実学と言います。すがたかたちの解剖学は現実学の一分野なのです（註1）。

変化するいのちのかたちを研究しようとしたのがゲーテでした。ゲーテは「現象の背後を探ってはならない。現象そのものが教えなのだから」と言っています。そして変わり続ける現象それ自体を研究しようとして、「原形とメタモルフォーゼ（変形）」という見方を提起したのでした。わたしたちの慣れ親しんだ見方では、植物は茎や葉や花や根などの部品から組み立てられたもののようにみられています。しかし、ゲーテには、イタリアを旅行し様々な南国の植物をみるうち、植物のすがたが、原形となる原植物が成長とともにリズム的に脈打ちながら、葉から萼へ、萼から花びらへ、そして花びらからおしべ、そしてめしべへと連続的に変身していくすがたに見えてきたのです。いや、見方と言うより現実にそのようなものであることを見いだしたと言った方が正確かもしれません。わたしたちでも、八重のサザンカなどで、花びらがおしべに変わっていく様子を見ることができます。

## 類型解剖学

このようなゲーテの見方を解剖学の世界で展開したひとが西成甫でした。西は、三木が比較発生学と血管注入の方法を教わった浦良治の先生です。西はドイツに留学しヒトの筋肉系、特に胴体の筋肉の発達を比較解剖学的

に研究しました。それは魚類、両生類、は虫類、鳥類などの脊椎動物を比較しながら、原形となる筋肉系のあり方をシェーマ（図式）として示すものでした。西はそれを自分で類型解剖学と名づけました。その成果はドイツの古典となった比較解剖学全書の中の論文として残されています。三木は西の東龍太郎教授への献辞のあるその論文の別冊を古本屋で見つけ大切にしていました（東教授は東大の薬理学の教授でしたが、その後、東京オリンピックの時の東京都知事になりました）。

また西が書いた解剖学の教科書は、欄外にたくさんの比較解剖学的な説明を註として載せているものでした。三木はわたしたちの解剖学の授業でこの教科書を取り上げ、この本では註に大切なことが書いてあると言って、ヒトのからだの成り立ちを理解するためには比較解剖学的な知識が不可欠であることを強調していました。比較解剖学の知識をもっと前面に押し出した解剖学書を書く、それが三木の解剖学者としての目標でもあったので

す。「解剖学ノート」（『生命形態学序説』所収、うぶすな書院）『ヒトのからだ　生物史的考察』（うぶすな書院）、また未完の「生命の形態学」（『生命形態の自然史』所収、うぶすな書院）はもともとはこのような意図のもとに計画されたものでした。

西に長年私淑していた三木は、直弟子になる島崎三郎につれられて晩年の西を鎌倉に訪ねています。おみやげに西のドイツの恩師フュールブリンガー教授の手紙をもらって、比較解剖学の伝統を受け継ぐ正式の免許をもらったと喜んでいたようです。イエナハイデルベルクの比較解剖学の伝統が、ここお茶の水に生き残っているとはお釈迦様でも気がつくめえと授業で言っていたので

す。三木の決して多いとはいえない解剖学の専門的論文の大部分は比較解剖学からみたヒトのからだの成り立ちを研究したものです。それは西の比較解剖学の研究をふまえたうえで西の弟子である浦の成り立ちの観点を含むものでもありました。それは複雑な変化を遂げたヒトのからだの構造について、まずはその部分的な構造の原形を探す研究だったのです。

## 原形とおもかげ

昭和四十七年、三木は千谷七郎の還暦記念論文集『うぶすな』に「『原形』に関する試論、人体解剖学の根底をなすもの」と題した論文を書いています。そして、原形とは何か、原形体得のもとになる生命記憶とは何か、そして生命形態の変化としての宗族発生の研究とどう関係するのかという問題に正面から取り組みました。そこでは原形は「おもかげ」や「らしさ」という言葉で表現されています。たとえば「犬」の原形とは「犬らしさ」、「犬らしい性格」のことです。

それはこころのはたらきによって直接体験される「意味」なのです。それは類似のものすべてに認められるが、それそのものとしてはどこにもないものです。また具体的に描き出された原形とは、いわばその「らしさ」の象徴的表現なのです。象徴的表現はそれを通じて原形を体得させてくれるものです。三木は「らしさ」を感じるこころのはたらきには何十億年もの生命記憶の回想が重ね合わされていると言います。かつてのかしこがいまここに同時に居合わせてそのらしさを感じさせてくれるのだと言うのです。ヒトのからだの原形をもとめて宗族発生におけるメタモルフォーゼを研究することが課題になります。

## ヒトのからだの原形

すがたかたちの解剖学という観点からヒトのからだを見直そうとする三木の試みは、基本的にはすでに昭和四

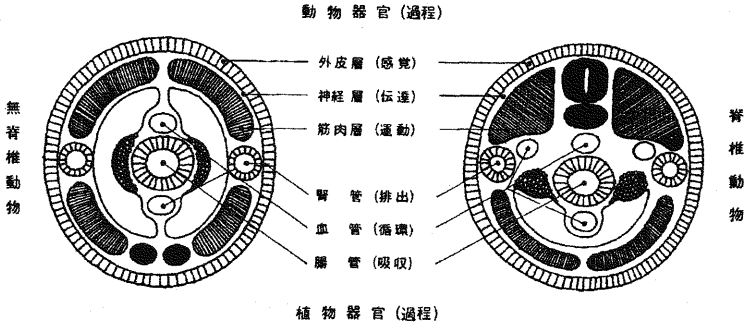
十一年の『解剖学ノート』（メジカルフレンド社）、昭和四十三年の『ヒトのからだ　生物史的考察』（学習研究社）などとして出版されました。昭和四十四年から準備された「解剖学総論」の草稿は、さらに発展したかたちで昭和五十二年から「生命の形態学」として『綜合看護』に連載され発表されていきました。

発生の初期、受精卵は分割を繰り返しながらイソギンチャクのような二重の袋になります。外側の袋が体壁を形成し、内側の袋が原始の腸管になります。そして袋の底が抜けて腸管が開通するのですが、新しくあいた穴が口になるのが脊椎動物（後口動物）、もとの穴が口になるのが無脊椎動物です（先口動物）。体壁がくびれて神経の管ができますが、無脊椎動物ではおなかの方に、脊椎動物では背中の方にできます。そして脊椎動物では神経と腸管の間に背骨が形成されます。

三木が見る動物のからだは、腸管という内臓の管を体壁という大きな管が包んでいる二重の土管でした。そして首から上の顔に当たる部分には体壁がなくて腸管（と神経管）が露出しているのです。つまりわたしたちが顔と見ているのは腸が脱腸したすがただというのでした。そして、動物の個体体制の原形を図（図　動物の個体体制）のように土管の輪切りとして示しました。すがたかたちの解剖学の基礎となる図で、三木家の家紋にしたいと言っていました。

## 内臓と体壁、植物性と動物性

さて土管の輪切りには脊椎動物のからだを構成する基本的な臓器がすべて配置されています。三木はからだを構成する様々な臓器を植物性器官と動物性器官とに分けました。前者は栄養と生殖という植物と動物とに共通のはたらきをする器官のグループ、後者は感覚と運動という動物にしかないはたらきをする器官のグループです。この場合、生命のはたらきの中心はあくまで植物性器官の方にあります。動物性過程はそれを補助するだけで




▲図　動物の個体体制　（三木成夫『生命の形態学』より）

す。植物性器官が内臓を、動物性器官が体壁を形成しているのです。

アリストテレスは「受け入れて出すのが生物である」と言いました。動物性と植物性のふたつの器官系は、それぞれは受容し伝達し排出するというみっつの段階が区別されます。植物性器官ではこれらが、消化呼吸系、循環系、泌尿生殖系の器官として内から外へと並び、動物性器官では感覚系、神経系、筋肉系が外から中へと並びます。そして植物性器官と動物性器官を代表するのがそれぞれの中心にある臓器、循環系の心臓と神経系の脳です。心臓と脳とはそれぞれ、「こころ」のはたらきと「あたま」のはたらきを象徴する臓器です。

三木はミケランジェロの「夜と昼」という作品は動物性器官と植物性器官の本質がよく表されていると見ていました。動物性器官が眠り植物性器官の働きが優勢となる夜を表す女性のすがたでは、動物性器官の目は閉じられ乳房とかすかに開かれた太腿の奥の生殖器など植物性

過程を強調されています。そして動物性器官の働きが優勢になる昼を表す男性のすがたでは植物性器官の入り口である口は肩で覆われ太腿は組み合わされ、大きく開かれた目と筋肉の盛り上がった背中など動物性過程が強調されています。一般に男性性は動物性器官の優勢化として、女性性は植物性器官の優勢化として表現されます。意志的な目と筋肉という感覚と運動との動物性器官を強調したミケランジェロのダビデ像に兵士の姿としての男性性の典型を見ることができるでしょうし、豊かな乳房と子どもをはらんだおなかという食と性との植物性過程を強調した先史時代のオーリニャック文化の母性像に女性性の典型を見ることができるでしょう。

## 分節性と分極性

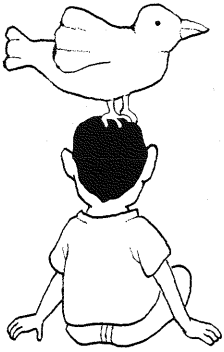
この個体体制を形成する二つの原理が分節性と分極性です。分節的な原形としての構造が分極しつつメタモルフォーゼしていくのです。動物のからだの土管は本来分節構造を持っています。つまり、同じ基本構造をした体節が竹の節のようにつながっているのです。それは多細胞生物の始まりが、簡単な構造をした生物がつながりあってできる珊瑚のような群体であったことを表していると三木は述べています。この分節性は原始的な構造を持った生物ほどはっきりしています。イモムシやミミズを思い出してみてください。ヒトのからだも基本的にはミミズと同じだというのです。受精卵の発生初期にはそのような体節がはっきり認められます。

ヒトのからだにもその体節構造がいまも様々な形で残されています。一番はっきりしているのは、胴体の胸の部分でしょう。背骨の節のひとつひとつに応じて神経や血管が平行して走っています。この基本的構造は、同じはたらきをする細胞が集まって臓器を形成したり、胴体から手足が生えたりすることで変形され見えにくくなっていきます。特に頭や顔や首の部分は変化が複雑です。あごのないヤツメウナギでは分節的にえらの穴が配列さ

れていますが、魚類になってえらの骨からあごの骨ができたり、上陸してえらが失われえらの骨や筋肉がほかのはたらきに使われるようになると、分節構造は見えにくくなります。頭の骨の上半分は四つの背骨が融合してできていると言われていますが、それはすぐには見極められません。しかし脳の中でのえらの神経の並びかたは昔もいまも変わりがありません。原形のおもかげをとどめている場所を手がかりにして変化の跡をたどることで、本来の分節性を原形として見いだすことができるようになるのです。逆に原形として示された分節の基本構造が、頭部、頸部、胸部、腹部などの部位で、それぞれどのように変形しているかを見ることもすがたかたちの解剖学の仕事です。

脊椎動物のからだにはさまざまな分極過程が認められます。植物性器官と動物性器官、内臓と体壁とは双極の関係にあります。栄養と生殖、つまり食と性との関係もそうです。感覚と運動の関係も双極関係で、どちらか一方だけでは成り立たないのです。臓器の配置にも分極性が認められます。植物性器官はおなかの側に、動物性器官は背中の側に、背腹に分極しています。植物性の内臓を動物性の体壁の鎧で包んで守っているように配置されているのです。

動物性器官の中では感覚器官と運動器官の頭尾の分極が認められます。感覚器は頭部に向かって集まっていきます。先端をなす目と鼻では脳の神経組織が直接外界に接しています。それに対して最大の運動器官は、筋肉（と骨）だけからなるしっぽです。植物性器官では口と肛門の間で吸収と排出の分極が起こります。消化の場所



がもともとの腸から胃へ、そして口へ、そして料理など頭と手による消化へと頭進します。それに対して生殖器官はしっぽの方向へと進み、ほ乳類の雄ではついに体外にぶらさがります。おなかの側の筋肉も舌とペニスの筋肉とが動物性の筋肉が植物性過程に関わるという共通性を保ちながら食と性の間で分極しています。動物性の筋肉である舌は本来捕食のための器官であり、のどから出た手であると三木は述べています。

## こころのからだとあたまのからだ

動物性器官と植物性器官との区別は実はもう少し複雑です。というのも腸や血管、心臓、生殖器などの植物性の器官にも元来動物性である筋肉や神経が関係しているからです。それは元来の動物性の筋肉や神経と区別され植物性の筋肉と神経と呼ばれます。三木はこれを植物性へ動物性過程が介入し支配していくすがたと見ました。そして生命史を人間の歴史でのこころをあたまが凌駕していく過程とつながるものと考えていたのです。

そもそも子どもの時には動物として過ごし親になると植物のように一ヵ所に定着し子どもを産むホヤのような生物が、一生動物のままに過ごすようになったのが動物のはじまりだといわれています。その場に「植わった」まま大地や大気と交流し栄養生殖を営むことのできる植物の完全性を失って、えさと異性とを求めて「動き回る」よりなくなった動物の姿に、エデンの園から追放されたアダムとイブの、あるいは帰る場所を失ったピーターパンの悲しみが見えます。それはさらにゲーテに言わせれば理性（あたま）ばかりを使って、どの動物より動物くさくなった人間の苦しみのみなもとでもあったからです。

しかし、実際には植物性の筋肉と神経とは「あたま」の言う通りにはなりません。それは自律神経と呼ばれむしろ「こころ」のはたらきと密接なつながりをもっています。動物性の筋肉と神経とが「あたまのからだ」だと

すれば、同じ筋肉と神経でもそれは「こころのからだ」に属するのです。植物性の神経と筋肉のおかげで「無意識に」周囲の様々な出来事に内臓が動き、こころがときめくのです。からだが目覚めて初めてこころが目覚めることができるのです。動物性器官までが植物性のはたらきをすることによってからだが目覚め、こころの目覚めが準備されたのではないでしょうか。

「解剖学総論」から「生命の形態学」へのタイトルの変更は重要です。それは三木の中での思想的発展を示しているように思われるからです。解剖学総論の総論は「解剖学とは何か」と題され、ゲーテの形態学に則った解剖学の方法が大きなテーマになっていました。生命の形態学の総論では「生の原形」、「植物と動物」など、むしろより一般的ないのちのすがたが大きく取り上げられているのです。それはやがて『胎児の世界』（岩波新書）で「いのちの波」として取り上げられるはずの問題です。解剖学を完成しようとしたときには、すでに解剖学を乗り越えて新たな飛躍が始まっていたのです。

（東京女子医科大学第二病院）

註1　「三木形態学と現実学」。『ヒトのからだ』（うぶすな書院）解説参照。

# モンテッソーリ教育思想の誕生(6)

## 活動主義による批判と知的教育

早田　由美子

マリア・モンテッソーリは「子どもの家」で子どもが自由に活動することを重視した。この活動を重視する思想はルソーやフレーベル、セガンにも見られ、彼らは活動を教育の重要な要素として位置付けた。十九世紀後半から二十世紀前半にかけて大きな潮流となった新教育運動を推進した人々も子どもの活動を重んじ、この思想は活動主義（activism）と呼ばれ、それをめざす学校は新学校（new school）と呼ばれた。アメリカのデューイ（一八五九―一九五二）やキルパトリック（一八七一―一九六五）らの進歩主義思想家をはじめ、ベルギーのドクローリ（一八七一―一九三二）やスイスのクラパレード（一八七三―一九四〇）などモンテッソーリを批判した人々も活動重視の立場にあった。

この活動主義の特徴は、子どもをただ知識を注ぎ込まれるだけの受身の存在として捉えてきた従来の見方を大きく変えたところにある。彼らは知識の画一的な詰め込みを批判し、子どもの内面からあふれでる興味や関心をもとに子どもの活動を援助していこうとした。

このように活動を重んじる考え方は二十世紀初頭の欧米で広まり、活動は鍵となる言葉にもなっていた。

モンテッソーリも活動主義の人々も同じように子どもの活動を重視し、子どもの興味を中心とした活動を通して得られる知性、教えられて知るのではなく自らの力で学び知ることをめざした。また、子どもの中に価値を見出し、子どもが社会を変える原動力であると捉えた。この意味で共通点をもつ。

しかし、活動主義の人々はモンテッソーリを批判し、モンテッソーリ自身も活動主義とは一線を画していた。

モンテッソーリが同じように子どもの興味や活動を重視し生きた知をめざしながら、他の運動とは異なる思想と見られるのはなぜか。今回は、これらを分ける見方の相違点を考えながら、モンテッソーリの独自性を見ていきたい。

## 活動主義の教育思想家からの批判

活動主義の人々はモンテッソーリに対してどのような批判を行っているのであろうか。

まずキルパトリックによる批判を見てみよう。彼は『モンテッソーリ法検証』（一九一四）で、モンテッソーリ教育において読み書き算数の教育が早すぎると批判し、「子どもの本性とは無関係な型通りの作業ばかりになってしまう」し、「子どもの興味も生き生きとした接触もない人為的な状況へ導く」と指摘した。

キルパトリックの師であった経験主義の哲学者デューイも、一九一六年に出版した本の中で、モン

テッソーリを次の点で批判した。

モンテッソーリの方法が「〈時間の浪費〉なしに、知的優秀性に達することにあまりに熱心」で、「ありふれた経験の材料」ではなく「大人たちが達成した知的優秀性を表す教材」に子どもたちを導くというのである（J・デューイ『民主主義と教育』松野安男訳）。

さらに、国際新教育運動の指導者の一人であった精神科医ドクローリも、モンテッソーリを批判した。彼は、一九〇一年、ブリュッセルに障害児のための特殊教育学院を作り、一九〇七年には、「生活のための生活による学校」の理念の下で、エルミタージュに実験学校を創設した人物である。ドクローリはモンテッソーリの方法を読み書きや算数に関する「教材が人為的」で「子どもをひきつけもせず感動させもしない」と批判した（A・スコッケラ『Maria Montessori これまでほとんど公刊されたことのない人物像』堀井幹二訳）。

また、一九一三年ジュネーヴに創設した実験学校「小さな家」で知られるクラパレードもモンテッソーリを批判した。彼は、モンテッソーリは、「非常に人為的であるという過ちを幼稚園とともに共有している」、「教具は変更されず固定されて、公理どおりに適用され」、「生活のどの問題とも結びついていない」と指摘した（F・デ・バルトロメイス『モンテッソーリと科学的教育学』）。

## 批判の検討

活動主義の思想とモンテッソーリの思想には共通点も多くあるのだが、このように活動主義の教育思想家

によってモンテッソーリは批判されている。

批判の中には妥当でないものもある。例えば、子どもの興味や本性と関係なしに教育が進められるとか、子どもを引きつけもせず感動させもしないなど教育を無理やり押し付けているというものである。

モンテッソーリの教育の中心原理が子どもの興味に基づく活動であったことは明らかであるし、モンテッソーリの教育活動の中で子どもが自分で何らかの知識や技能を持てるようになった時の「知る喜び」や「分かる喜び」を何度も述べていることはすでに見てきた。

また、時間の浪費なしに早く目標に達することをめざしたなどの批判もある。これについても、モンテッソーリが子どもの興味に基づいて好きな作業を何回でも繰り返すことを尊重し、その中で、子どもにとって必要なものを納得いくまで自分のものにしていくことを重視したことを考えれば、決して時間の浪費なしに早く目標を達することをめざしたわけではないことは明らかである。

そこで、その他の批判について考えてみたい。特に「ありふれた経験の材料」ではなく「人為的」な教材を用いているという批判についてである。

彼らが指摘するように確かにモンテッソーリの「子どもの家」は周到に用意された人為的な環境であった。デューイやキルパトリックらの経験主義者は日常生活のありふれた直接的な経験や生活そのものが教育を行うと考え、現実の生活の諸要素をバランスよく単純化し凝縮した環境を学校の中に設定して、「できるだけ加工しない生の材料」を用い、直接経験させることによって思考力や問題解決能力を獲得させることを主張したのであるから、その立場からは当然の批判とも言える。

モンテッソーリも直接経験を重視していなかった訳ではなく、「子どもの家」の教育内容に園芸や自然と

の関わりの時間を取るなど自然を通しての教育を大切にしていた。ただし、モンテッソーリの教育思想と方法を特徴づける点は、物のさまざまな性質を認識させたり、個々の感覚を個別に錬磨させる「感覚教具」や、学ぶべき基礎を明瞭な形、明確な方法で表した「科学的教具」である。彼女は、それを自由な活動の中で用いることで、子どもの生き生きとした「生命」と「知性」を共に発展させることをめざしたのである。

このように、モンテッソーリの思想と活動主義の思想の相違は、現実や生活や直接経験に対する重点の置き方が異なっていることから生じていると考えられる。

デューイをはじめとする人々がめざすものは、生活に密着し、生活の中で実際的に働く技術、応用力、問題解決力である。それらは社会生活の中で経験を積み重ねることで獲得されると考えられた。

では、その生活の内容はどの階層のどのようなものであるのであろうか。

当時、アメリカでも階層差は存在し、人種差別や先住民に対する差別、男女差別もあったが、白人（二十歳以上）の非識字率だけをみると、一八五〇年にすでに約十パーセントとなっていた。一九〇〇年には白人以外の人々も含めた全体の非識字率も十一・三パーセントに減少する（C・M・チポラ『読み書きの社会史』）など教育機会も整い、民主主義が進展し、人々の生活は全般的に豊かになりつつあった。

このような社会的状況の中で、デューイは一定の理想的生活像を設定し、重要な諸要素を取り出そうとしたと言える。

一方、子どもなりの社会生活を通して社会性や生活力を身につけることを期待したクラパレードが関わった「小さな家」の子どもたちは、裕福な中産階層の子どもであった。この子どもたちの状況は、デューイの

思想の基盤となった民主主義社会発展中のアメリカの子どもの状況と近いと考えられる。

それに対して、モンテッソーリの思想を形成した時期のイタリアでは、産業化は進みつつあったが、児童労働や捨て子などの多様な問題に加えて教育機会の貧困や激しい階層差などの問題が山積していた。一九〇〇年には五割の人々が読み書きできず、非識字率が約十パーセントになるのは一九五〇年になってからであった。要するに、アメリカに比してイタリアは当時数十年の遅れをとっていた。しかも、モンテッソーリが最初に関わった子どもたちはローマのスラム街に生活する最貧困層の子どもであった。

これらの子どもたちにとっての現実の生活はデューイやクラパレードの想定する生活とはかけ離れたものであった。苛酷な現実生活と連続させた生活の経験から学ぶことは、アメリカでのそれとは意味がかなり異なる。学ぶことになるものは、結局繰り返される抑圧された生活や差別的規範や差別の構造であり、彼らの差別され抑圧された状況は変わるべくもなかった。

モンテッソーリは当時の社会状況の中で子どもや女性の解放を考えていた。幼い頃から劣悪な環境の中で育つ子どもの問題の解決には教育による知性の形成が必要であると考えたモンテッソーリは、男女共通の生活技術の教育や自然を通しての教育も重視したが、その特徴は、むしろ生活に規定されない基本的内容を「科学的教具」を通して伝え、どのような生活にも対応しうる基礎的認識能力と知性の基礎を形成しようとしたところにあると考えられる。批判者は生活から離れた人為性や読み書きや数に関わる知的教材に対して批判したのであるが、この点こそがモンテッソーリの独自性である。

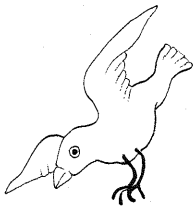
モンテッソーリの時代のイタリア社会、特に、彼女が最初に関わった子どもの劣悪な生活状況は、モンテッソーリに生活から学ぶというよりむしろ生活に規

定されない教育、現在の生活から脱皮させうる教育を考えさせることになったとも言えよう。

デューイも、自分の生まれた社会集団の限界から脱出できるような機会の提示の必要性を認識していたが、生活に密着した知性は、生活そのものを問い直す知とはなりにくい面がある。また、よく言われてきたことだが、体系的系統的学問は経験や生活の中では効率的に学べないという問題もある。また、この生活の内容は地域や時代によって多様であり、ある地域で通用した生活能力が別の地域で通用しないこともありうる。生活に即した教育も大切だが、現実の生活を変えたり、問い直すためには、生活を離れたところで対象化できる認識能力や判断力、思考力が重要なのではないか。また、抽象的概念や体系的な学問の積み重ねはより広い世界の中で一定の力を与えることになると考えられる。

## 生命・活動・知性

モンテッソーリは子どもの生き生きとした生命の躍動を重視した。その生命の力を援助するために興味に基づく活動と自由な作業の選択を基本とする原則を確立した。また、子どもが知への欲求をもつこと、さらにセガンの方法を土台にした感覚を刺激する生理学方法によって子どもの興味はさらに引き出されることを確認して、さまざまな効果的方法を積み重ねていった。作業の中には、目的に無理なく進むための準備活動が含まれており、子どもは興味をもつこと、行いやすいこと、分かりやすいことからはじめ、好きな作業を繰り返すことで、作業に熟達し、その上で次のステップに進んでいく。そうして、無理なく、容易に知的好奇心を継続したままいろいろな内容を習得できる方法が取



られている。作業の内容には物の性質などを観察し、比較し、判断して認識能力や思考能力、集中力を向上させるためのものやそれを動かす手段である言語能力を向上させるものなどがある。

モンテッソーリは子どもが興味をもって作業に関わることで自由な活動によっても最終的には同じ基本的内容を確実に学ぶと考えており、このような形で貧しい子どもたちに対して階層格差や能力格差を埋め合わせる機会を確保しようとした。

読み書きや算数の「早期教育」が批判されるが、早期に提供する機会を開くことによって、当時劣悪な生活環境の中にいて知的刺激を受ける機会のない子どもや七歳になれば働くために幼児期にしか余裕のある時間が取れない子どもも、より良い環境に育つ子どもと同じスタートラインにたてるようにめざした点こそが評価できるのではないであろうか。そして、どのような生活や社会を背負っている子どもも知性の基礎を確実に習得できる方法として世界的に普及したと考えられる。

アメリカのヘッドスタート計画で家庭環境に恵まれない就学前の子どもに適用されたり、タイにおけるカンボジア難民のキャンプなどで使用されて効果を得た例はそのことを示している。

モンテッソーリの思想と方法は二十世紀初頭の子どもの状況の中から生まれ、世界の幼児教育に大きな影響を与えてきた。二十一世紀を迎え、政治的経済的社会的な要因によって世界の南北格差はさらに広がり、就学率、識字率の階層格差、男女差も容易に埋まっていない。子どもに関する新たな状況も出現している。それらに対応していくために、モンテッソーリに学びつつもさらに多面的かつ総合的研究を続けていく必要がある。

――終――

（夙川学院短期大学）

# その三

嶺村法子

幼稚園から道路二本はさんだ向こう側に、かつて小学校のプールだった場所があります。併設の小学校が開校九十周年の記念事業で、校庭を掘ってシーズンオフにはトラックになる蓋付きのプールを作ったので、校外のプールは必要なくなりました。そこで、プール跡地に土を入れ、子どもたちが栽培活動のできる畑に生まれ変わらせることになりました。

〝月一園〟と名付けられたその畑では、小学生、幼稚園児だけでなく、園芸の好きな地域のおじいちゃん、おばあちゃん、PTAのお母さん方を巻き込んで、様々な野菜や花が育てられています。五年目になった今年は、土作りやカラス対策も万全で、学年ごとに区切られた畑のそこここで収穫の歓声が上がりました。

春

肥料をすき込み　畝を作り
両手にそうっと包み込むように
ピーマンとナスとトマトの苗を植えた
オクラと綿の種もまいた
水をやり　支柱を立て

夏

蚊に刺されながら　草抜きをした
畑に行くたび　両手いっぱいのおみやげ
とっても　とっても　次見に行くと
もう　オバケキュウリになっている

「ねえ、これで何作る？」
「カレーにしようよ〝月一カレー〟」
「前のうみ組さんが作ってくれたよ」
「今度はあたしたちがみんなに作ってあげようよ」
「じゃあ、明日のお弁当はご飯だけでいいですってお母さんに言ってね」

# TO・NI・KARA ひろば

ナスをざくざく　トマトもざくざく
「ピーマンも入れちゃえ！」
「ええっ、キュウリも入れるの？」
「いれよう　いれよう」
「どんな味かな？」「ほんとに大丈夫？」

「うわぁっ、キュウリがとろけてる！」
「カレーとキュウリって結構合うよね」
「お母さんにも教えてあげなきゃ」
「オクラのトッピング、お星様みたい」
「ぼくピーマン嫌いだけど食べられたよ」
「スーパーで売ってるのよりおいしいね」
「大きくなあれ　おいしくなあれって
　みんなで　お水をやったからだね」
「栄養たっぷりになるように　がんばって
　草抜きもしたからね」
「こんどはサラダ作ろうよ」
「あたし、家からおみそ持ってこよう。

　キュウリにつけて食べるとおいしいよ」
「マヨネーズとお醤油も合うよね」
「オクラにはやっぱりおかかとお醤油かな」
お弁当のテーブルの真ん中に、
ひと盛りにした　ざく切りサラダは
あっというまに　からになる
みんなでつついて食べる　質素なサラダが
〝本日のメインディッシュ〟
になる　ひととき

子どもたちが栽培にかかわれる時間はわずかだが、〝自分たちで育てた〟という思いが野菜の味を変え、自然の恵みを分かち合う喜びにつながる。その陰に、私たち以上に汗を流してくださった地域の方がいる。銀座まで徒歩圏内のここ月島にも、汗を拭きながら子どもたちと畑仕事に精を出す暮らしがある。

（中央区立月島第一幼稚園）

# 障碍をもつ幼児の保育(1)

## ―この子と出会ったとき―

津守　真
津守　房江

今回、私共は障碍をもつ幼児を中心に据えて、語り手と聞き手という形式で保育を語ることにしました。形式をととのえて話そうと思うとどこを第一章にしていいか分からなくなってしまいます。なぜかと言うと障碍が前提になって話すことになるからです。障碍をもつ子どもの場合も、保育そのものはどれも変わらないと最初から思っていたからです。私共は、障碍をもつ子どもとかかわって五十年になります。今日最初に取り上げるS君の話はつい昨日の話ですが、この中に含まれる本質的なことは、以前にも何回も出会ってきたことです。こういうところから出発すれば障碍をもつ子どものことがだんだんに話せるのではないかと思います。

# 歩くということ　その一

## S君は見通しをもって模索した

**津守　真**（以下Mと略記する）

昨日、十五歳になるS君が、私共の家の造形教室（私共の子どもたちが独立して使わなくなった部屋を利用して白井多実が主宰している活動）にはじめて来ました。そのときのことから始めましょう。

S君は私の家に来ると、まず玄関から外に行きたいと身振りで示しました。車椅子で両親と一緒に来たS君は、垣根につかまって歩いて端まで行きました。最初私は戸外に行きたいのかと思いました。S君はそこを見渡すと行き止まりになっているのが分かりました。それ以上先には行かないで逆の方向の物置の隅に行き、そこも行き止まりだと分かるとすぐに玄関に戻りました。門から外に行くか、それとも玄関から家の中に入るか、S君は迷った様子を示しましたが、本人は家の中に入ることを選びました。それがはっきりしていて、S君は自覚をもって行動していることが私に分りました。家に入ってからのやりとりを見ていると、手足の動きは思うようにならないことが多いが、造形をしている他の子の中で分別をもって行動しました。それが私には強い印象でした。

**津守房江**（以下Fと略記する）

分別をもって行動するということをもう少し詳しく話してください。

**M**　S君は発作もあるし、手足の動きが唐突だから、

ちょっと手を動かしただけで周囲の物がひっくりかえったりします。けれども、本人としては自覚をもって行動しているから、その意図するところを信じて環境を作れば、どんどん自分でうまく行動するようになるに違いない。あなたは歩けるんだからどこにでも行っていいよと言ってくれる場所が、これまで愛育養護学校（以下愛育と略記する）以外になかったのでしょう。よその家に行けば、台所や寝室は入ってはいけないとか、もっと制限があるのが通常です。

今日の場合で言うと、玄関から庭へ出て探索していたとき、植えたばかりの苗を踏んでもかまわないと私は覚悟していた。ところが、S君はできるだけ踏まないように分別をもって行動していました。ちょっとは踏んだけれど（笑い）。

F　今日、あなたが心を動かされたのは、S君が自覚をもって移動し、伸び伸びとしていたことだったのでしょう。

M　子どもが何かをできるようになったとき、それが歩くことであろうと手を使うことであろうと、それを子どもは使いたいと思う。そのときに励ましてあげればそれが成長のもとになると私は考えています。

F　そのできるようになったことというのは子どもによって違うでしょう。S君の場合はそれが歩くことであって、今日は気持ちよく歩いた。歩くことによって自分が今いるところを確認することだったと思う。自分が今いるところを出発点としてそこにまた戻ることができる場所、通過点としての場所ではなくてドアを開けば次が開けて、またそこに戻ることができる。S君は空間に固執してそこから次の段階を開いていったのでしょうね。

## 以前のS君の様子

M　S君は、愛育を卒業して以来、自分が歩いて行こうと思うところに歩いて行かれないという環境でした。

そこを話すのにS君の前史を話しておかねばならない。S君が愛育に入学して来たのは小学校一年生のときです。私はその頃数年間あまり愛育に行くことができず、S君とあまり付き合いがありませんでした。その間の様子を聞いてみると、一年生のころはほとんど移動ができなくて、車椅子に乗せられたままだった。二年生くらいのときに急にいざり歩きをするようになって、見る見るうちに速いスピードでいざるようになり、一人で立って歩くようになった。私は、S君があれよあれよと言う間に歩けるようになったことに驚きました。愛育では子どもが行こうと思った所に、職員室であろうと応接室であろうと、学校の中ならばどこでも行ってもいいよと励ましています。そういうようにやってきて、じきにS君はつかまって歩くようになり、別人かと思うようになって私が驚いた時期があったのを思い出します。ところが愛育養護学校を六年生で卒業した後、どこの専門の訓練所でも、自分で歩いて行っていいよと言われなくてむしろ規制されたので、もうそこには行かなくなってしまった。結局中学校にも行かなくなってしまいました。

更にその前の小さいときのことですが、S君は心臓が悪くてその手術のときに事故で脳梗塞を起こしました。それが二歳前後で、それまでしゃべったり走ったりしていたのに急に歩けなくなり話せなくなり、親たちは大きなショックを受けました。

そこから今日の話になるのだけれど、これは障碍をもつ子どもの一つの典型ではないかと思う。造形教室の傍らでそんなことをS君の両親と話しました。

F　S君は発作が起きるんでしょ？

M　そう、突然発作が起きる。

F　こういう子にはひとりひとり丁寧にかかわることが大切だから、あまり早くから集団行動をするような場はすすめられないのではないかしら。

M　そう、すすめられない。特に幼児期では親も一緒

に入って遊べるような緩やかなところがあるといい。

## 歩くことは嬉しいこと、そして成長すること

M　どんな子どもでも、歩き始めた頃、自分で歩いてどこにでも行ける環境があるというのは成長のひとつの条件になるのではないだろうか？

私は愛育で何人もの子どもでそのことを確認しました。私がかつて担任をしていた三歳の女の子はいつも額にしわを寄せて、自閉症と言われていました。母親は東京に引っ越して来たばかりで、狭いマンションの一室で母子二人きりで、子どもが外に出たいと言っても出て行かせられないでいました。その子が初めて愛育に来たとき、どんどん歩いて職員室に行き、応接室に行き、学校中毎日歩き回ってそれ以外のことはしないくらいでした。

F　幼稚園や保育園でも、朝、まず園の中を走り回らなければ一日が始まらない子どもがいるけれど、同じことでしょうね。

M　そう、同じことです。親は、歩くことの大切さをなかなか分かってくれない。この学校は歩く以外は何もしてくれないと私は母親から言われました。私は思うところに歩いて行くことが今のこの子のすべてだと思い、何週間も一生懸命にそれをやったのに。あるとき実習生と私がピアノを弾いて子どもと一緒に踊ってとても楽しかったことがありました。その子ははじめて笑いました。その時その子の世界がパーッと開けたように見えました。それは私にとって嬉しい瞬間でした。

歩いて行こうと思うところに自分で歩いて行ける環境を作ることが成長の元だということ。私はそこが言いたいのです。

F　思うところに歩いて行けることがなぜ成長の元と考えるのでしょうか？

M　なぜかとは分からないけど。人間はそういうふうにできているのではないか。人間の成長は、第一に存

在感がしっかりしていること、第二に、能動性、第三に相互性、第四に自我が大事と私は考えています。存在感はいつも愛されているという確信から、能動性は子どもがやろうと思うことの価値が周りの人に認められる環境から生まれます。それは一見簡単に見えるが、今の時代にはなかなか難しい。子どもが自分でやろうとすることには必ず意味があるのに、結果に結び付かないことは切り捨てるので、今の時代は原因結果で考えるから、子どもが心の底で本当に願っていることを見ることができない。

F　子どもが自分の足で歩いて移動することの意味については、「人間とはそういうふうにできている」と言うだけでは説明にならないでしょう。私は、移動することによってぐるっと回ってまた戻って来る循環性が大事なのだと思います。外に行ってもまた元に戻って来るという存在感が根底にあっての能動性だと思います。愛されて受け止められるだけではなくて、移動によって自分の場所があることを自分から把握することによって存在感が更に確認できるのではないか。

M　それは循環性の問題。愛育の場合には、ひとつのドアをあけるとまた元に戻るという循環空間があった。このことは幼児期に一般に言えることだと思います。

F　子どもによっては、枠の外へ、外へと向かって行くこともありますね。それはどう考えたらいいのでしょう。

M　それはひとりひとり違うし、時期によっても違うことでしょう。また次の機会にとりあげましょう。

F　今回、話しているなかで、人が自分で出来ることの自信と、生きていく場所の把握というふたつの大きなテーマが浮かび上がってきました。

生きもの共存の畝間から(4)

# 溢れる天敵に守られて

徳野　雅仁

夏の自然菜園は、昆虫や小動物が溢れ、オモチャ箱をひっくり返したようなにぎやかさです。これだけの昆虫がいれば、虫害も心配ですが、意外にも作物には被害が見当たりません。どうして虫害が少ないのか、それぞれの虫を注意深く見ていくと、その多くが天敵であることに気づきます。つまり、作物を食べる虫を捕食する昆虫や小動物なのです。クモやハチ類、カマキリ、ナナホシテントウ、ヒメマイマイカブリ、コウガイヒル、ムカデ、トカゲ、ヒキガエルはみな天敵で、アリやアブ、カメムシにも虫を捕食する仲間がいます。

オオカマキリが、作物の頂上部などで獲物を待つ姿をよく見かけますが、同じカマキリでもハラビロカマキリは作物の茂みのなかで、コカマキリは地面を歩きながら獲物をさがすというように微妙に棲み分けています。オオカマキリはフ化直後の体長は一センチほどですが、大きく生長する秋口には体長九センチもあるエビガラスズメの幼虫をも捕えて食べ、動くものを追う習性があり、食べ終わるとすぐ次の獲物をさがす大食漢です。

天敵のなかでもクモ類の活躍は見逃せません。葉の裏にうみつけられたヨトウガやモンシロチョウやコナガの卵は、フ化と同時にほとんどクモに食べられてしまいます。雑草があり、敷き草が畝を覆っていれば、クモは増え、虫害防除を一手に引き受けてくれます。クモにはこのように移動し

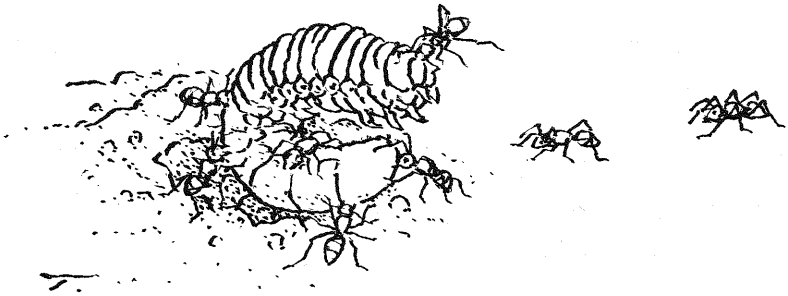
て獲物を狩るものや、雑草の茂みに網を張ってカメムシやガやオンブバッタなどを捕えるものがあります。クモの活動の舞台は葉の表や茂みのなかですから、その営みを見ることはそれほどむずかしいことではありません。

また、ハチには昆虫を捕食する仲間が多く、ガやチョウの幼虫を狩る達人ぞろいです。とりわけハシリグモを捕食するオオモンクロベッコウは足が速く、逃げるハシリグモを猛スピードで追いかけ、見失うと地上数十センチを旋廻し、隠れている茂みに突入します。それでも分からなくなると突然、目立つ場所にコロッと身を横たえ、手足を痙攣させて死んだふりをし、それを見たハシリグモが安心して草陰から出た瞬間に起き上がって追いかけ、しとめるという頭脳作戦をとります。

攻撃的なシオヤアブは、支柱などの先にとまって周囲を窺い、甲虫やアシナガバチまで捕えて体液を吸います。落葉、雑草の堆積場や、プランターの下にはカタツムリの天敵であるコウガイヒルやヒメマイマイカブリが棲み、土中に棲むコガネムシの幼虫やヨトウムシがアリによって地上に引き出され巣に運ばれる場面にはよく出会います。

昆虫や小動物の営みに目を向けてみると、自然菜園は生きものによって守られていることに納得させられます。

（イラストレーター　イラストも筆者）



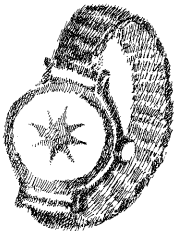
コガネムシの幼虫を穴から引き出して巣に運ぶアリ

特集〈緑蔭図書紹介〉

# 探検家シャクルトン

## ―現代の求めるリーダー像―

藤田　宗和



私は幼児の教育という明るい領域とは対極をなす、犯罪・非行臨床心理学を専門としている。この領域は、広く人間一般の行動を対象とする心理学の中では、例外を対象とする分野である。そのためか、読書の関心も例外や特異な状況のものが好きだ。特に海洋冒険小説が好きである。海という自然は、軟弱な人間関係を拒否し、その人間の持つ人間の本質をあらわにしてしまう場であるからである。

ところで、今回取り上げるのは、探検家シャクルトン（Shackleton）であるが、名前を知らない人が多いと思う。探検家では最初に南極点に到達したアムンゼンやそのライバルであるスコットと同時代の人である。その陰に隠れてシャクルトン

は、日本では無名である。なぜなら、彼は、南極縦断の壮挙を企図したが、結局失敗した人であるからであろう。しかし、最近欧米で再評価されているという。

その理由は、シャクルトンのリーダーとしての卓越した資質にある。探検に失敗したのになぜか？　それは、彼の探検隊は一年半もの間南極海の氷に閉じ込められていたのだが、彼は、二十七名の隊員のうち、一人の犠牲者も出さずに極寒の地から連れ帰ったからである。その影響を受けてか、我が国でもシャクルトン関係の本がいくつか出版され、三冊ほど読んだ。**『エンデュアランス号奇跡の生還』**（アーネスト・シャクルトン著　奥田祐士訳　ソニー・マガジンズ）は、シャクルトン自身の手記であり、**『エンデュアランス号漂流』**（アルフレッド・ランシング著　山本光伸訳　新潮文庫）は、探検記録、隊員の日記などをまとめたものであり、**『史上最強のリーダー　シャクルトン』**（マーゴ・モレル、ステファニー・キャパレル著　高遠裕子訳　ＰＨＰ）は、そのリーダーの資質を解説したものである。

シャクルトンの探検の経緯は以下のとおりである。一九一四年、第一次世界大戦が始まった年に、彼は、エンデュアランス号に乗って南極横断の途につく。探検開始早々、南極大陸に到着する前に、船は零下三十度以上の寒風吹きすさぶ、流氷原に十ヶ月近く閉じ込められる。氷の圧力によって船が破壊された後は、犬橇と救命ボートに載せられるわずかな食料や備品を持って、二十七名の隊員を引き連れ、氷原をさ迷うことになる。その後、氷原が溶け出し、足元が崩れる中、三隻の救命ボートで荒れる南極海に乗り出す。家より大きな荒波を乗り越え、近くの島にたどり着くが、人のいる島まではまだ一三〇〇キロメートル

もある。そこで、彼は五人の隊員と一隻のボートで救助を求めて再び南極海に漕ぎ出る。やっとのことで人のいる島に着くが、捕鯨船の基地は島の反対側であった。食料も尽き、決死の覚悟で山と氷河を横断し、捕鯨船の基地に助けを求めることができた。しかし、彼の仕事は終わらない。すぐに周囲を動かして、救難船を確保し、仲間のいる島へ救助に赴く。あと数日で再び流氷が島の周りを埋め尽くす寸前、残った隊員を無事救助したのが一九一六年の夏であった。

装備も機材も現代と比較すると貧弱な二十世紀初頭に、圧倒的な自然の力を前にして生半可なリーダーシップではとうてい不可能な困難を克服したのである。それも隊員全員を救い出したのである。こんなところから、いろいろな意味で危機状態にある西欧世界で、リーダーの手本として再評価されたのであろう。

極寒の地で、いつ果てるともない生活が続くという極限状況では、人間は陰鬱で絶望的な気分に陥ることが普通である。実際十九世紀末に南極海に閉じ込められた船では、乗組員は憂鬱になり、集中力を失い、食事もとれなくなり、最終的にヒステリー症状を起こす者、暗闇の恐怖のために心臓発作を起こした者もでたという。しかし、彼の探検隊は驚くほど明るい。明日の食料にも事欠き、生命の危機に直面する状態でも、晴れた日には氷原でサッカーや犬橇レースを催している。また、ブリザードが吹きすさぶ暗黒の中、湿度の高い、しかも煙いテントの中で、詩の朗読会、合唱会、バンジョーの演奏会などを行っており、とても遭難したものとは思えない。トラブルはもちろん幾つかあったが、氷原の中の冷たくじめじめしたテントでの生活について、隊員の日記には、「なんともつらくて、粗っぽくて、しかも楽しい

生活だ」と記されているのが印象的である。

彼のリーダーシップの特徴は、決断力、慎重さ、計画性など一般的にいわれるリーダーシップはもちろんであるが、人間の本質に対する鋭い洞察と信頼であろう。具体的には、彼は、食料の分配、仕事の役割、寝場所の指定などを他の隊員と平等にするように要求した。自分がやらないことは他人に命令せず、むしろ問題のある隊員を意識的に自分の周りに集めた。また、各人の能力・適性を考慮し仕事の役割を与えたが、同時に、全員に逆の仕事を行わせた。科学者が床磨きを行い、航海士が料理を作り、甲板員が科学標本の採集を行った。仕事には厳しかったが、先に述べたように同時に遊びを大切にした。さらに、一対一のコミュニケーションを大切にし、隊員を人前で非難しないし、叱っても後腐れを残さない。加えて、いろいろな情報を隊員に公開し、助言を求める。しかし、最終決断は彼自身が行った。

すなわち、人は公平平等に扱われれば、不満を持たない。上位者がnoblesse oblige〈高い身分に伴う道徳上の義務〉を遵守することを期待する。また相手の大変さを認識することで協力精神が生まれる。緊張のあとにリラックスをすることで精神の均衡を保てる。人は皆の前で恥をかくことに耐えられないが、頼りにされると嬉しいといった人間の本質を、彼は無意識のうちに知悉していたに違いない。その背景には、人間に対する基本的な信頼がなければこのような行動はとれないといえる。特にどのような状況でも楽観的に考え、明るさを失わない彼の振る舞いに、隊員は希望を鼓舞されたといえる。加えて、彼の手記には、悲壮な決意や気負った人命尊重などの言葉は一言も記されていないのである。その結果、彼の探検隊は、全滅してもおかしくない状況にも、シャクル

トンを中心に一致協力して、困難を克服したといえよう。

最近わが国も、戦後最大の経済的、文化的な危機に直面しているが、それを立て直すべきリーダーの不祥事があとを絶たない。また、何年か前の高校生の意識調査でも、ヒーローという言葉から連想する人は、「スポーツ選手」、「映画の登場人物」、「マンガの登場人物」、「歌手・シンガー」が大半を占めていたのを読んで驚いた。青少年のヒーローのイメージは少なくとも社会を動かすリーダーではないようだ。最近の意識調査でも、人に迷惑を掛けても自分の利益を主張するなど、利己主義的な行動を取る人が三割もいることが報じられており、日本全体に悪しき個人主義が蔓延している状況にあるといえよう。

このような状況で、新たなリーダー像として、強靱で、かつ人間を信頼し、大切にする仲間に希望を与えてくれるシャクルトンのような人物を期待する人が増えることを望むものである。特に子どもたちの心の中に、このような明るく、骨太で、前向きなリーダーが定着するようになればと思う。

ちなみに彼の船の名前は「エンデュアランス」、すなわち「不屈の精神」である。

（お茶の水女子大学）

# 『らいおんみどり』にかくされた「さすがのおねえさん」のなぞ

田澤　薫

子どもとの日常のなかで、互いにわかりあえない場面は思いのほか多い。はじめ、子どもがことばの獲得途上にあった頃は、いずれことばさえ自由になれば思いを伝え合うことは容易だろうと思われた。けれどそのうちにわかったのは、「言えるけど言わない、だけどわかって」という大人の心模様を、彼らも持つのだということだけだった。かわって、五歳になる娘と私の間では、ただ読んであげる時間をともにする道具だった本が、思いを託す仲立ちとしても活かされるようになってきた。本をめぐるなぞ解きはますます難しい、しかし楽しいものとなっている。

娘は、四歳半のときに弟が生まれて姉になった。私たち父母は仕事を持って忙しくしていて、

これまでも決して十分に相手ができていたわけではない。限られた父母との関わりをこれからは弟と分け合うことを考えると、どんなにか葛藤もあろうかと思われたが、娘は、心配された赤ちゃんがえりも弟へのやっかみも見せずにすんなりと弟との共存を受け入れたようだった。

そればかりか、娘は、彼女が生まれてから今日までに私が慈しんできたとそっくりのやり方で、弟をかわいがった。丁度、字が読めるようになった喜びのまま本読みに熱中している時期でもあり、食事がおわったときなど私が片づけにたつと同時に「さぁ、ご本でも読んであげましょうか」と自分の本棚に向かうことが日課になった。不思議なもので、まだ首もしっかりすわらないうちから弟は姉の読みきかせに熱心に応えた。時には赤ちゃん向けの本、でも大抵は姉の関心にあった幼児向けの本。どう考えてもゼロ歳児向けの本ではなくとも、弟は、姉を見つめ、姉が見せてくれる本の頁を見つめ、おはなしにじぃーっと耳を傾け、時々は唱和するように声を出してあきることがなかった。

そんなあるとき、ふと、娘が『**らいおんみどりの日ようび**』（中川李枝子さく　山脇百合子え　福音館書店）を繰り返し選んでいることに心がとまった。『らいおんみどり』は、物語本なので、絵は少なく、それも白黒ばかりという地味なつくりである。おまけにわが家の『らいおんみどり』は三十年近くも前に私が子どもだったときのものなので、全体的に古ぼけてページも黄ばんでいる。どう見ても、五歳児を惹きつける見栄えの本ではない。どうしてこればかり？　と不思議でならなかった。

もちろん『らいおんみどり』のおはなし自体が、娘は以前から大好きではあった。舞台は〝う

たえみどりのしま"。同じ作者による『かえるのエルタ』にも登場する、緑色でトランプがすきなライオンのらいおんみどりと、ネコの姉弟のトロとトランペ、それに白クマのムクムクが、ある日曜日に出会ってサーカスをする物語だ。

ただ私には、この本のとりこになったおぼえはない。子どもの頃の記憶をたどると、『らいおんみどり』はきらきらしていて目眩がしそうだった。『かえるのエルタ』とは比較にならないくらい空想にとんだファンタジーに思われ、サーカスひと筋のトロ団長はエキセントリックな雰囲気が少し怖くさえあった。ところが大人になって読み返してみたら、登場人物（登場動物）にとっては「ゆめのような」出来事が描かれてはいるけれども……実に日常的で他愛ないことの連なりでお話が構成されていて、ちょっと拍子抜けした。改めて考えてみれば、日曜日というのだって、私は共働き家庭の子どもであったから、貴重な家族みんなの休日はそれだけでうっとりする要素は十分だったが、らいおんみどりにとってはせいぜいたてがみを洗う日にすぎない。サーカスだって、実際のところはサーカス遊び、サーカスごっこではないか。たとえば、物語のクライマックスのあたりで、らいおんみどりの頭にのったみどりいろの帽子からトランプがこぼれおち、トロ団長が拾ってナップザックに入れる場面はこうである。

まぁ、トランプの雨。

あとから、あとからふってきて、らいおんみどりは、目をあけることも、うごくこともできません。

とうとう、むねまでトランプにうまり、

「トロ団長、たすけてくれ。」

とさけびました。

ビーチパラソルの中から、トロが、青いナップ

ザックをもってあらわれました。

トロは、トランプを一まいのこらずナップザックへ、ひろいあつめて、らいおんみどりへ、わたしました。

子どもの頃の私は、すっかり物語に引き込まれてサーカスのマジックにかかり、見物の動物たちと一緒に息を呑んだ。でも現実的に考えれば、一組分のトランプが頭上から落ちるのはあっという間で、それほど劇的ではない。確かに小さな子どもだとびっくりして目をつぶって「たすけて！」となるだろうけど……。一方でばらまかれたトランプを拾い集めるのには手間がかかる。見物客にまるめた背中を見せつつ地面に這いつくばってこネコがカードを拾う……。実は、何ともぱっとしない場面ではなかろうか。そうか、この本は、客観的に大人の理屈で考えれば特段すてきでないことを、日曜日という設定とサーカスという素材のもつ魔術で飾り付けて、まばゆい光をあてて、目を眩ませていたのだな、と思い当たった。幼いときの印象が強烈だっただけに、何だか肩透かしをくったような気にさせられた。

それなのに、どうして娘は『らいおんみどり』ばかり手にとるのだろうか。

翻って娘を思うと、まさに彼女は『らいおんみどり』の世界に生きている。椅子をひっくり返せば遠足バスになり、クッションを並べれば子ども部屋が動物園になる。ほんの一瞬のお店屋さんごっこのために延々と続ける準備の作業。折り紙や画用紙からあっという間にうまれる素敵な商品の数々……。そんな娘には、トロが屈んでトランプを拾い集める間の抜けた時間は一瞬に収斂されて、出し物の輝かしさを損なう問題にはなりえない。

娘は弟に読んで聞かせていた。

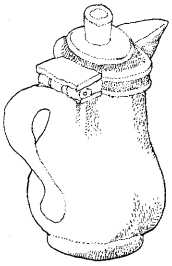
そのものすごい音に、さすがのおねえさんもミシンをやめ、かおをあげたかとおもうと、

「おそかったわね。」

と、ふたりをにらみつけました。

「さすがのおねえさん」たるトロ団長の台詞にさしかかるとき、娘は思い切り感情を込めて怖い声音で読み、その度に「えへへ」と照れ笑いをしていた。

なるほど、娘はトロ団長なのか。娘にとってはこの本の主人公はらいおんみどりではなく、サーカスが好きで、創意工夫に富んでいて、わがままなほどのリーダーシップを発揮するトロ団長なのにちがいない。姉ネコのトロとくらべて、弟ネコのトランペはいかにも情けない。身体がトロより小さいばかりでなく、そそっかしくて、へまばかりしている。姉のいばりん坊ぶりを愚痴りながらも、お腹が空けば姉に頼り、姉の遊びの仲間に入れてもらおうと一生懸命になり、姉の姿が見えなくなったときには無我夢中で「ねえさーん、ねえさーん」「あぁー、ぼくのだいじなねぇさんー。」と空じゅうを探し回る。姉なしではいられない、誰よりも姉が好きなトランペにとってトロは、かけがえのない姉貴なのである。娘が姉としての自分を思うとき、ひとつの手がかりとして想起されたのがトロ団長だったのだろう。弟相手に繰り返し読み、その物語世界を弟と共有しようとすることで娘は自分を支え、崩れないでトロのような「さすがのおねえさん」を生きる力を得て



いたのかもしれない。

トランプを拾い集めるトロのまるめられた背中の幼さに、いまの娘が気づこうはずはない。『らいおんみどり』の魔法に満ちた幻想世界が、何のことはない幼い人たちの日常そのものだということに、昨夏の私はまだ思い至っていなかったのだから。

（尚絅女学院短期大学）

# 同級生の小説

原田宗典『十七歳だった！』集英社文庫　他

大田清隆『夕焼けの彼方に』文芸社

山本　政人

面白い本が見つからない。書店に行けば、文字通り山のように本があるが、そのなかから面白いものを見つけるのは至難の業である。

私はときどき自分で小説を書いてみるが、読む

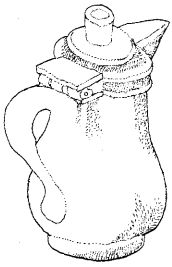
ことよりも書くことの方が面白いし、楽しい。仕事としてではなく、自由に想像し、創作することは、もしかすると最高の幸福かもしれない。人に読んでもらい、肯定的に評価されることも嬉しいが、それは二の次のことで、自由に創造することがまず楽しい。

私は無器用であるため、音楽とか絵画とか芸術には縁がなかったので、創造というと文学しかなかった。それで下手な小説を書いて一人悦に入ったりしているが、それにはきっかけがあった。それは高校時代の同級生に作家がいたことである。

その人が高校の同級生であり、かつ有名な作家であるということを知ったのは、だいぶ後になってからだった。妹に指摘されてその人の作品を読んでみると、なるほど高校のときのことが書いてある。登場人物で思い当たる者の顔も思い浮かぶ。ただ、肝心のその人の顔が浮かばない。その人とは原田宗典氏である。

原田氏の高校時代、そして私の高校時代のことを書いた作品は、多少のフィクションを交えているとはいえ、概ね実際の出来事である。そしてそれらの作品は衝撃的だった。原田氏の作品がユーモアに溢れていることは確かだが、高校時代のことは面白おかしく書かれているわけではなくて、出来事そのものが面白おかしいのである。私はこんなに面白おかしい高校生活を送っていたとは思っていなかった。受験勉強だけの暗い高校生活を送っていたかのように思い込んでいた。

ところが原田氏の作品を読んで思い出したのである。結構楽しいどころか、かなり面白い高校生活だったことを。私自身、授業中なの



になぜか教室を抜け出して友達とピンポン玉で野球をやっていたり、掃除の時間にやはり野球遊びをしていて、バットに見立てた箒で見事教室の窓ガラスを粉砕したりした記憶が甦り、何と自由奔放な高校生活をしていたのだろうと思ったものである。暗いと思ったのはガールフレンドができなかったためだろうか。あんな面白い時代を思い出させてくれた原田氏には感謝している。

先日、大学時代の同級生から本が送られてきた。『夕焼けの彼方に』という小説である。著者の大田氏とは大学に入学してすぐ知り合いになり、その後よく彼の下宿で麻雀をした。彼はさだまさしが好きだったのか、麻雀の最中いつもさだまさしの曲をかけていた。それから彼は短歌が上手で、歌には外見からは想像もつかない（失礼）純粋さと素直さがにじみ出ているのだった。送られてきた本の帯にも彼の歌が紹介されていた。

いまだしも　いにしへ人の気配あり
はるかの道より我に袖振る

歌から想像がつきそうだが、小説は大学生である主人公が奈良を一人で旅するところから始まり、そこで出会った若者たちとのその後の関係と、主人公の心の動きが丹念に描かれている。同じ世代で、同じような生活をしていたせいか、主人公たちの心の動きがよくわかり、描かれている友情なのか恋なのかはっきりしない微妙な心理状態を、私も同じように持っていたかもしれないと思った。当時の東京の風景と学生生活が思い起こされて懐かしさを覚えると同時に、身近にいた友人が、とても豊かで純粋な感性を持っていて、それが今もなお変わっていないことがとても嬉しく思えた。

大田氏は大学を卒業して大手印刷会社に就職

し、その後退職して故郷の飛騨高山に帰り、今は高校の先生をしている。最近は年賀状のやりとりをするぐらいだが、今年の年賀状には高山で撮った星空の写真が印刷されていて、いかにも彼らしいと思えた。生き方が一貫していて、それは年賀状にも小説にもストレートに表れており、都会で生活してきた私には、彼の生き方そのものが懐かしいものだった。それは自分が失ったのか、それとも最初から持っていなかったのかもしれないが、いずれにせよ、今の自分には「彼方」にあって手の届かないものである。

奇しくも、今年二十五年ぶりに同窓会が開かれることになった。みなそれぞれ立派になって、髪の毛も薄くなっていることだろう。『夕焼けの彼方に』は青春小説であるが、著者が過ぎ去った青春を懐かしんでいることを題名が語っている。今、私は人生の黄昏に入りつつある。青春は夕焼けの彼方にあって、懐かしく思い起こされるのである。

ところで、私の小説は短いものを書き溜めて、少しずつ人の目にも触れるようになりつつあるが、それは恥ずかしいことではあるものの、甚だ気楽である。これが本業の論文となるとそうはいかず、人の目に触れるのは恥ずかしいというより恐ろしい。研究者（自分でそういうのもおこがましいが）としては長い「引きこもり」状態にある。小説を書くことは、そんな自分にとって「治療」なのかもしれないなどと思うこともあるが、それは自己韜晦で、大田氏の小説とは随分と異質である。

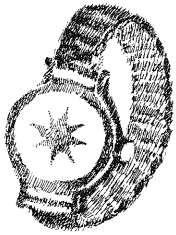
（学習院大学）

# 介護の本質を考える

## 三好春樹『元気がでる介護術』

岩波アクティブ新書　二〇〇二年

小林　瑠以



この本では、介護する側とされる側が織りなす十一の小さなドラマに沿って、老人介護が語られている。

著者の三好春樹（一九五〇～）は理学療法士。二十四歳で特別養護老人ホームの介護の仕事に就いた後、三十一歳でリハビリテーション大学校を卒業、理学療法士となった。誰もが大病院に就職したがるのだが、三好はもとの職場である特養ホームに心ひかれるものがあって、自ら希望してそこに戻ってしまった。

理学療法士というのは、運動障害を持った人に筋力の増強のための訓練、関節をもっと動かせるようにするための訓練などをして、その回復・改善をはかる専門職であるが、三好はどうしても理

学療法士のわくにおさまることができない。

例えば、在宅介護で片マヒの母親にビー玉つまみ、編み物等の訓練を熱心にやらせている娘から相談を受ければ、温泉への一泊家族旅行の実現を企てる。また、施設においては、「遊びリテーション」と名付けている、「風船バレーボール」「ゲートボーリング」（ゲートボールの玉で空き缶を倒す）等のリクリエーションを推進する。

三好の考えによれば、「多くの人は老人が寝たきりになるのは身体の障害が原因だと考えている」が、そうではない。例えば、よくある脳血管障害で片マヒの人が寝たきりになるケースは、片マヒなら使える方の手足で起きたり立ったりできるはずで、それが寝たきりになるのは「相互的で多様な人間関係が失われ、治療される、介護されるという一方的な関係によって受け身にされ、主体が崩壊」するからである。三好は、だから「老人へのアプローチとして必要なことは、身体へのリハビリなどではなくて、関係づくりのケアである」と言う。

三好が特養ホームで介護の仕事をするようになったのは、老人介護に興味があったからではなく、高校中退のため「就職先がなく、人手不足で困っていた特養ホームにしか入れなかった」からである。

私には、この本を読んでいて、三好の到達した老人観のルーツには学園紛争体験があるのではないか、ということが思われた。

三好が高校生だった時期は、私が大学紛争をやっていた時期でもある。生徒に一定の知識・技能を習得させ世に送り出す学校教育システムは、生きている生徒ひとりひとりの主体を育てないという思いが私にはあり、学校教育そのものの意味を問うことにより、自分の主体を取り戻そうとし

たのが、私にとっての大学紛争だった。

三好にも、似た思いがあったのではないだろうか。三好が自分の主体の危機に対して敏感だったからこそ、片マヒで寝たきりになってしまう老人の「主体の崩壊」にも気付いたのではないだろうか。

三好は「介護は介護力ではない」「介護の本質は介護関係だ」とも言っている。介護保険が施行されることになった時、コムスンやニチイ学館といった大手介護業者が介護市場を席巻するだろうというのが大方の予想だったにもかかわらず、その予想は見事にはずれた。これは、三好によれば、大手業者は「促成栽培された二級ヘルパーを集めて介護力を提供すれば、困り果てている老人や家族はすぐにフリーダイヤルに電話してくると思った」が、「老人や家族の求めているものは、単なる介護力ではなく」、「変なヘルパーに家の中に入られるくらいなら、たいへんでも一人でみたほうがいい、と考えている」からだ、と言う。

私は、自分自身の介護体験から、三好の「介護は介護力ではない」「介護の本質は介護関係である」という言葉に共感する。

私にはパーキンソン病で痴呆の母がいる。弟一家が一緒に住んでいるので、私は時々訪れ母とふたりで昼食を食べるぐらいのかかわり方しかしてこなかったが、母の痴呆が重くなり、弟夫婦の負担も大変になったので、去年の夏からは、私も介護に週二日通うようになった。

母は自分からしゃべることは、ほとんどできない。表情も乏しいし、起きていてもすぐ眠くなるから、母とのコミュニケーションは困難を極める。だからといって、私が介護力だけを行使しようとするとたんに、うまくいかなくなる。薬を飲ませようとしたら口を開かない。トイレに行か

せようとしたら動かない。

母がその気になるのを待つしかない。食後の薬を母が飲もうとしなくても、しばらくしてまた勧めてみる。それでもだめならまたしばらくして、それでもだめなら何遍でも。飲む時は飲むのである。驚いたことに、私の姿勢がそんな風になってきたら、だいたいのことがうまくいくようになった。

今年の四月、母は特養ホームに入所した。母に面会に行くようになって、私ははじめて老人介護施設というものにも接する機会を得、母以外の老人たちも見た。そういう目で私の母へのこれまでのやり方を振り返ってみると、これは、母と私の場合たまたまこれで何とかやれたということではなく、介護者が老人に接する時の基本的な姿勢とも言うべきものであったらしい。

どんなに痴呆が進んでも、言葉で表現できないだけで、その人の気持ちというものはある。介護者はそれをどこまで受け止められるか、いつも試されているように思う。

痴呆の介護ばかりではない。三好は「私自身も遅まきながらも子育てを体験することになった。その中で実感的にも、老人ケアと子育てに通底するものを感じとり、……」と言っている。言葉の力に頼ることはできず、相手の気持ちを受け止めようという姿勢があった時に、はじめて道は開けてくるのは、老人介護も子育ても同じかもしれない。

（音楽教室主宰）

# 生活発表会をめぐって

## ―保育の見直し一年目―

入江　礼子

### はじめに

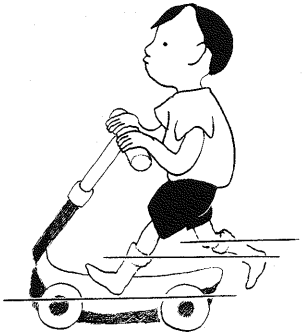
保育の見直しをはじめた平成十三年度、それまで伝統的に続けてきたマジックミラーの裏側から子どもたちには分からないように幼稚部での様子を観察する観察日を廃止した。そのかわりに保育参加ウィークと銘打って、六月と十一月の二回保護者参加型の保育公開ウィークを持った（その経緯は本誌第一〇〇巻十号、一〇一巻第四号に書かせていただいた）。保育の見直しを始めて一年目の保育を公開するということにはとても勇気がいったが、ともかくありのままを見てもらって、それをもとに保護者との話し合いを持ち、少しでも私たちの保育を理解してもらいたいという思いから批判を覚悟で実施したのである。

## 親たちとの話し合い

ところで幼稚部では昨年度まで保護者との話し合いの場はクラス懇談会のみで、父母の会もない状態であった。そこで今年度は保育の見直しとともに、保護者ともオープンにして話し合っていくシステムを模索した結果、父母の会の試行的な立ち上げとともに、園長・副園長との各クラス月一度の懇談会をはじめることとした。その結果、この懇談会は担任とは違った角度からみた子どもたちの様子を伝えたり、保護者の側からはそのとき心配に思っていることなどが話される場として位置づき始めた。また、大きな行事などがある月には前もって保護者にその意味や大枠を説明する場ともなった。

第二回保育参加ウィーク後の保護者の大きな関心は十一月から二月に先送りした「生活発表会」であった。懇談会ではそのことを説明しなければならない。そこで職員会議で例年の生活発表会の様子を保育者から聞くことにした。この生活発表会では、クラスごとに歌、踊り、合奏、劇というように形が決まったプログラムをずっと続けてきたということであったので、いままでの不都合やら、今年の子どもたちの様子を見ての改善点を話し合った。そのことを踏まえて私の方からの要望として、まず併設大学の講堂（約八〇〇人収容）では広すぎること、もう少し子どもと親が近くで、無理なく楽しめるようにしたいので今回は幼稚部のなかにあるリズム室で行ないたいという提案をし、リズム室案で保護者に説明することになった。

懇談会では年長、年中、年少といつも通りクラスごとに話したのだが、年長組の保護者との話し合いはかなり白熱したものになった。私たちの方針の大きな柱は子どもたちに



とって無理がなく楽しめるものにしたいというものだった。そのためには例年行なっている併設大学の講堂で行なうのではなく、幼稚園にあるリズム室で行ないたいと提案した。しかしその途端、反対の声があがった。「えっ、何でですか？　せっかく立派な講堂があるのに。他の幼稚園ではわざわざお金を出してホールを借りるんですよ。もし、大学が貸してくださらないのなら、他を借りてもいいです。ともかく最後の生活発表会だし、なんとかなりませんか？」（保護者）。「大きい講堂だと、子どもたちの声が聞こえにくいので、固定マイクのところでせりふを言うことになるんです。そうすると劇もリズムが途切れてしまうことになるんですよね。だからマイクを使わなくても聞こえる大きさのところでやった方が良いと考えました」（私）。「三年間、この生活発表会を祖父母も含めて楽しみにしていたんです。一生懸命やっている姿をビデオにも収めたいし。リズム室じゃあね。何のためにこの園に入れているんだか分からなくなってしまうので、どうしても講堂でやって欲しいです」（保護者）。「母親たちも大きな舞台で歌うのを楽しみにしているんですよ。親たちにとってもわくわくする日なのです。なんとかなりませんか」（保護者）。「講堂でやるのでなければ意味がないので、それだったら、子どもを休ませます！」（保護者）。「……」（私）。

私や副園長のNさんが考えた以上に併設大学の講堂で行ないたいという意見が多く、そして強かった。このまま、リズム室案を強行しようか、それとも講堂でやることにするか……。一応親の意見をもう一度職員会議に持ち帰るということで回答は少し待ってもらうことにした。

職員会議では親たちの要望が以上のものであり、特に年長の親たちが強硬であったことを伝え、どのようにするかを検討した。今年度の幼稚部の様子を親の側から考えてみると、園長の交代から始まって、例年とは違うことだらけと思える日々だったといえる。その時々の説明で納得できることもあったとはいえ、やは

り生活発表会のような親たちからは「子どもの晴れ舞台」と思えるようなことの変更はなんとしても阻止したいということだったのだろう。このような状況でリズム室案を強行することは他のことでも保護者の協力を得られなくなる可能性が出てくると考えられた。そこで今年度は例年通り大学講堂で生活発表会を行うことにし、その中味を子どもたちに無理がないようにしようという譲歩案を保護者に提案することになった。この提案は一様に親たちに安堵感をもたらした。とはいえ私としてはまさに朝令暮改を地で行く結果となったわけである。これもまだまだ保護者に自分たちの保育を伝えきれていない現実ととらえ、大学講堂という場で行なうという制約のなかでその中味だけはしっかり目の前の子どもたちをみてやっていこうと保育者たちと話し合った。

## 生活発表会までの経過

二学期の末に例年の生活発表会のもち方を保育者に聞いた。それによると劇をやるのは年長で、自分たちでせりふを考えて作るということ、また練習期間は約二週間でその間の保育内容はほとんど発表会に向けての準備だったということであった。さらに普段の園生活の内容と発表会での内容はほとんど連動していないということもわかった。今回もまた、いままで園では行事と普段の保育の関係についても詰めた話し合いを行なうという風土がなかったということが明らかになった。場所は例年通り大学講堂を使用するが、内容だけは何とか子どもたちの普段の生活が出るようなものにして欲しいと話し、それぞれどんな内容にするかを冬休みの間に考えてきてもらうことにした。

三学期を迎え、生活発表会まで一か月を余すだけとなった。三学期からは保育者の一人が産休に入り、四歳児のクラスには今までフリーで入っていた他園を二年経験した保育者が担任として加わることになった。また新たに、いわゆる自由保育形態を中心として保育を展開している園で十一年の経験を持つ保育者にフ

リーとして入ってもらった。

学期始めの話し合いでそれぞれのクラスの計画が話された。三歳児のクラスは六人という少人数でもあり、果たしてどうなるのか不安もあるが、子どもたちが大好きな絵本から題材をとってストーリー展開を行い、それに現在興味を持っている楽器を使う場面を組み入れてやっていきたいということだった。また、四歳児のクラスは彼らの好きな踊りや楽器を保育者の作ったストーリーのなかにはめ込み、その練習もできるだけ普段の保育の中で自然にやっていきたいという方針が話された。そんななか五歳児の担任はとても悩んでいた。その悩みの大きなものは例年通り劇と合奏を二つともやるのかどうかという問題だった。このクラスは年度始めのクラス懇談会でも紛糾した。以来保育者がそういう親のプレッシャーを感じ、今回の発表会でもプログラムを今までどおりに合奏と劇の両方をやるべきか、あるいは子どもたちの状態に合わせて劇一本にするかで迷ったのである。私は担任に発表会の場所は親の意向を反映した形で譲歩はしたが、その内容に関しては例年通りというよりも今の子どもたちの姿をみて、この発表会を通して何を育てていきたいかということに絞って考えても良いのではないかと話した。それからしばらくして担任は経験豊富なフリー保育者と相談しながら、そのときのクラスのねらいである「他の子どもたちの気持ちに気づく」ということが少しでも達成できるような内容をもった劇一本でやっていくと決断した。

担任たちはそれぞれ日常の生活を大切にしながらも、生活発表会の出しものに向けての時間も組み込んだ一日の流れを試行錯誤しながら作っていった。

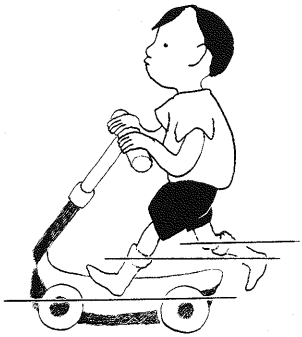
三学期が始まって二週間たった頃、併設短大の学生によるオペレッタが大学講堂で披露され、幼稚部の子どもたちも招かれた。動物が主人公の舞台は、今子どもたちが取り組んでいる発表会の内容と重なり、子どもたちも舞台に集中していた。オペレッタの後には特別に幼稚部も舞台に上がって「世界中の子どもたち」

を手話つきで歌うことになった。保育者側の予想に反して子どもたちは物怖じせずに舞台に上がり、楽しそうに歌った。この様子をみて、やり方、持っていき方によっては子どもたちが楽しみながらできるかもしれないという手ごたえを得た。この舞台を機に、私たちのなかにあった講堂での発表会に対する後ろ向きの思いが払拭された。

とはいえ、大学講堂で子どもたちが楽しく行なうためには、いくつか越えなければいけないハードルがあった。一つはマイクの問題だった。今までは二本の固定マイクを置き、子どもたちはせりふごとにマイクの前に出て話していたという。それでは劇にならない。集音マイクさえあれば、この問題は解決できるのではないか。ということで毎年学芸会を行なっている併設小学校に聞きに行った。すると集音マイクはあるとのこと。ならば大丈夫、子どもたちの劇の流れを中断せずに行なうことが可能だ。それからともかく講堂は広いので、その広さを計算に入れて子どもたちの姿が引き立つように大道具の準備もしなければならない。今年度は幼稚部での自主的な実習を申し出てきてくれた短大生に舞台の大きさを睨んだ背景を考えてもらい、製作を手伝ってもらった。ともかく担任たちが日常生活を大切にしつつ、かつ子どもたちとともに劇作りができるように後方支援だけはしっかりやっていきたいと考えたのである。

## 大学講堂での練習

幼稚部は学園の西端に位置し、大学講堂は東端にある。その移動は子どもたちの足で五分はゆうにかかる。いよいよ一週間後に迫った発表会。大学講堂は普段、子どもたちの生活の場でないため、一週間をかけてその場に慣れつ



つ、練習する時間をとることとした。この時期、幼稚部では風邪やインフルエンザが流行り、とくに四歳児のクラスがその直撃を受け、毎日半数近くがお休みという日も多かった。二月という時期では逃れられない運命なのかもしれない。そんな悪条件ではあったが、講堂での練習が始まった。まず初日の三歳児。なんといっても講堂が珍しい。広い講堂は走り回るには絶好の場所だ。あちこち走り回っては大きな声を出しての大騒ぎ。三歳児らしいといえばとてもそうなのだが、担任の求心力が求められるということを再確認した。ともかく講堂に通って慣れてもらい、この場は珍しい場でなくなるのを待つばかりという感じだった。四歳児は休みの人が半分いたこともあり、筋をつなげるのが大変だった。そして五歳児。ほとんどの子どもたちがストーリーをつかめているからだろうか、やる気満々。場を変えてみて、年齢によっての違いが際立った一日目となった。

それから約五日間、講堂での練習が続いた。三歳児も場に慣れはじめ、出しものもいつも遊んでいる遊びを舞台に持ってきているので割と自然にできる日も多くなってはきた。しかし相変わらず珍しいものが舞台にあるとそれに気をとられるので、本番の日の出来は神様の思し召しに任せようと、担任は緊張しながらもゆったりすることを心がけたようだ。四歳児は相変わらず休みの人が多く、少々心配をしたが、自分たちの劇だけではなく、五歳児がやっているのを楽しんで見たり、衣装を着るとそれが嬉しいらしくはしゃぐ姿も見られた。また五歳児も四歳児の劇のなかの踊りの場面になると一緒に踊ったりと、子どもたちは子どもたちなりに楽しめている様子が見えてきた。また自分たちの劇でもアドリブを入れたりと、回を重ねるごとに工夫している様子がうかがえた。

一方、この間に子どもたちの様子を少しでも理解してもらうために、担任には劇が出来るまでの過程や、幼児期の一年間の成長がどれだけ大きいものであるかをプリントして配布してもらった。ともすると、自分

の子どもにだけ焦点を当てがちな保護者に少しでも広い目を持って子どもたちを見守って欲しいと願ってのことである。

## 生活発表会を終えて

こうして大きな舞台で行なうという制約のもとでの発表会となったが、短大生や大学生にもボランティアとして入ってもらい、その助けもあって少なくともキリキリした発表会にはならずにすんだ。例年よりも劇の内容がよく分かったという保護者の声もあり、一応はホッとしたが、五歳児の親のなかには合奏がなかったことでがっかりしたという意見を述べた方もいた。保護者のマイナス意見のなかには今の保育の弱点を突かれている場合がある。このことを謙虚に受け止めなければとも思う。

一応子どもたちはなんとかこの大舞台をこなしたものの、大きな舞台で演ずることを意識し、かつ楽しめたのは五歳児だけだったという現実もあった。子どもたちにとっても無理がなくそして保護者も楽しめるものをということを今後も目指すのであれば、この舞台については再考を要するだろう。

ただしこの問題は舞台をどこにするかという問題に留まる問題ではない。保育の見直しを始めて一年目ということもあって、私たちよりこの幼稚部という場では先輩の親たちが多い現状のなかでは、こちらがよしとしたことを今回のように不本意であっても引っ込めざるを得ないこともあった。また、こうしたいという思いはあっても、幼児理解をふまえた保育内容、及び技術の面でまだまだ達成できないことも多い。でも、できないこともオープンにしつつ、保育を開いていき、話し合いを続けることで次のステップが見えてくるのではないか。保育の見直しという一つ一つを自分たちで考えていく地味で時には心痛い作業を続けつつ、「開く」という言葉をキーワードにして、二年目を迎えたいと思っている。

（鎌倉女子大学・同幼稚部）

# 編集後記

今月から、津守真・津守房江両先生が、語り手と聞き手という形で保育を語る、「障碍をもつ幼児の保育」が始まります。お二人は、障碍をもつ子どもたちとかかわられて五十年になられます。お二人の保育についてのお話が楽しみです。

＊

早田由美子先生の連載「モンテッソーリ教育思想の誕生」は今月が最終回です。私は、今回の連載を通して、二十世紀の初めの、イタリアに生きた、一人の女性としてのモンテッソーリに心引かれました。

例えば、彼女は、人類学の〝ものをよく見てよく知る〟という方法から子どもの個別研究という視点を得て、従来のように子どもを集団として見るのではなく、一人一人を見るという新しい方向をめざします。そこでの彼女の関心は、個人の身体に関する測定調査から、さらに子どもの行動の観察に移っていきます。そしてその観察は、〝自由に自発的に活動する子どもを、子どもとの受容関係を基盤としたなかで観察する〟というものです。

モンテッソーリは、当時、「知性とは無縁と考えられていた障害児やスラムの子どもや女子にも知的好奇心や集中する心があること」を見出します。このように、モンテッソーリが「多様な学問思想の動きと成果に敏感であり、多様な視点を偏らずに総合的に採りいれ」ていく過程に圧倒されました。

（A）


幼児の教育

第一〇一巻　第八号
（二〇〇二年八月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十四年八月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620 東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113―8611 東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。


☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

大人気！ 手づくりアンパンマンシリーズに、新しい１冊が加わりました。

# 手づくりアンパンマンがいっぱい６

## つくってね あそんでね

最新刊

＊作るのも楽しい、遊べばもっと楽しい、簡単おもちゃを、アンパンマンの仲間たちのキャラクターで作りましょう。

＊子どもが一人でも作れるものを中心に、ちょっと大人の手助けがいるものも加えて、楽しく手づくり、会話もはずみます。

＊ＢＳ日テレ「それいけ！アンパンマンくらぶ」で放映された作品もあります。テレビで見ている人も、いない人も、この本で、手づくりにチャレンジ！

**ジャ～ンプ！**
ジャンプ　ジャンプ
ロケットジャンプ

**とことこ アンパンマン**
とっとこ走るよ～
アンパンマン

**なかよしダーツ**
「わたしガダーツ
チャンピオンよ！」

☆島田明美☆
「楽しくなければ仕事じゃない」を基本スタンスに、楽しい工作のアイデアを発表しています。

島田明美／著

ＡＢ判　96頁　定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
**フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇一巻　第八号　平成十四年八月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

# 保育専科増刊号新刊とバックナンバーのご案内

**保育専科増刊号は、ワン・テーマで１冊を構成した永久保存版のムックです。各巻とも、保育現場ですぐ役立つアイデアや情報を、わかりやすく楽しいイラスト・図版中心のヴィジュアルな展開やわかりやすい解説でお届けします。**

好評発売中

## もっと運動会を楽しくする 魔法の本
ごっこ遊び運動会のアイデア100

いつもと違ったアレンジで、より楽しい運動会作りをめざす保育者におすすめの１冊。紹介されている競技は全部で100。森の中の運動会や楽しい対決いっぱいの運動会、お話仕立ての運動会など、ごっこ遊びを取り入れたユニークな運動会アイデアが満載です。子どもたちの想像力を生かした楽しい運動会は、保護者や保育者や子どもたちみんなの楽しい思い出を作ります。

行事あそび研究会／著

ＡＢ判／116頁／定価：本体1,267円＋税

最新刊

## お父さん力（パワー）を保育に

園と家庭や地域が協力して子どもを育てていくことが求められている今、お父さんの力を保育の場で生かしていけたらとても素晴らしいことです。これまで子育てから遠ざかっていたお父さんたちが、お父さんの集いを通して子どもや園と交流を深め、保育を豊かなものにしていきます。

渡邊真一／編著

AB判／116頁／定価：本体1,267円＋税

好評発売中

## 折って作って飾って遊ぼう 折り紙遊びアイデアノート

いろいろなバリエーションの折り紙遊びアイデアが満載の１冊。３つの難易度別に計25種類の折り紙を紹介。さらに、ちょうやチューリップなど、伝承折り紙を使った製作物や壁面、歌遊びやふれあい遊びなどを新提案！年齢別にまとめた折り紙保育の実践例も必見です。

浅村都子・津留見裕子／編著

ＡＢ判／116頁／定価：本体1,267円＋税

キンダーブックの
**フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

定価　五五〇円（本体五二四円）☆